

027

長期的な関係性を基盤とした官民連携による 切れ目のない被災者支援体制の構築

#ウェルビーイング

取組主体

認定特定非営利活動法人
レスキューストックヤード

従業員数

想定災害

活動地域

約 20 人

全般

石川県

平時から構築してきた自治体や社会福祉協議会との信頼関係を基盤に、三者連携会議や支援拠点の設置を通じて、避難所・在宅避難者・仮設住宅を横断した切れ目のない被災者支援体制を構築している。

1 取組の概要

- 認定特定非営利活動法人レスキューストックヤード（以降、RSYと表記）は愛知県名古屋市拠点の災害支援 NPO で、2002 年 3 月に法人化された。安心して暮らせるコミュニティの創出と災害に強いまちづくりを目的に、平常時から災害救援ボランティア・コーディネーターの発掘・養成や人々が助け合い・支え合う社会の構築に資する活動に取り組んでいる。
- RSY は、平成 19 年能登半島地震から石川県穴水町と関係を構築し、令和 6 年能登半島地震の発生直後から支援活動を行っている。1 月 1 日の地震発生後、すぐに穴水町社会福祉協議会（以降、穴水町社協と表記）職員らと連絡を取り、1 月 2 日に準備を整え、1 月 3 日には第一次支援隊を派遣、1 月 4 日から本格的な支援活動をしている。
- 初期段階では炊き出し支援を中心に、プロのシェフの協力も得て 1 日最大 1,500 食を提供した。これらの食事は、避難所となっていた「さわやか交流館ブルー」を拠点に、穴水町内 56 カ所の避難所や在宅避難者にも配布されている。
- 2024 年 1 月 16 日からは、穴水町・穴水町社協・NPO による定期的な三者連携会議を開始している。この会議は内閣府リエゾンや石川県リエゾンも参加するオープンな場となり、避難所の状況や在宅避難者の課題を共有し、官民連携で解決策を検討する重要な場となった。現在も隔週で会議を継続して実施している。
- 2024 年 6 月、町内最大の仮設団地が位置する穴水陸上競技場の管理棟に、支援拠点「ボラまち亭」を設置した。名称は、伝統的な見張り台「ボラ待ち櫓」と「ボランティア」を掛け合わせたもので、事務所機能、駄菓子コーナー、交流スペース、厨房設備等を備え、地域住民の交流の場として機能している。
- 現在は地元住民の自立支援に重点を置き、地元農家の野菜や福祉施設の手作りの品等を販売する「わけっこコーナー」の運営や、地元女性による手作りパンやスイーツの提供等、被災者の生きがいがづくりや地域経済の活性化にも貢献している。



ボラまち亭の様子

《取組の検討・実施体制》

- 穴水町での支援活動は、穴水町役場や穴水町社協との緊密な連携のもとで実施している。在宅避難者訪問では、民生委員らと協働し外部支援者と地元支援者の両方が関わることで、被災者が話しやすい環境を作り出した。
- ボラまち亭の設置・運営にあたっては、公益財団法人日本財団や社会福祉法人中央共同募金会の助成金や全国からの寄付金を活用した。老朽化した施設のリフォーム工事費用は RSY が負担し、地域に根差した支援拠点として機能させている。常駐スタッフ 5 人と地元採用のアルバイト 2 人で運営を継続している。

2 取組が始まった経緯・背景

- RSY と穴水町の関係は平成 19 年能登半島地震時に始まった。当時、穴水町社協に常駐スタッフを派遣し、ボランティアセンター運営を約 2 ヶ月間支援した。力仕事だけでなく、避難所運営や在宅避難者支援等、地元ボランティア団体と協働して新たな支援の形を作り上げ、支援活動に対して穴水町から感謝状を受け取っている。
- 10 年後にも再度感謝状を受けるなど、RSY と穴水町は長期的な信頼関係を構築している。東日本大震災の際には RSY が支援に入った宮城県七ヶ浜町へ、穴水町がボランティアバスを派遣するなど、相互支援の関係も育んできた。
- 令和 6 年能登半島地震の発生後、RSY の代表は、全国災害ボランティア支援団体ネットワーク代表理事を兼務していることから 1 月 2 日に石川県庁に入り、翌日には穴水町を訪問している。
- ボラまち亭設置の背景には、長期的な支援活動には拠点が必要という考えがある。当初は学童保育施設を一時的に借りていたが、恒久的な拠点を求めて町と交渉している。RSY の東日本大震災時の支援拠点「ボランティアきずな館」の経験を活かし、全国からのボランティアが宿泊できるスペースも整備するなどして、被災者に寄り添う環境を整えた。

3 取組による効果・成果

- 避難所支援では、プロのシェフと協力して温かい食事を町内 56 カ所の避難所に配布している。これにより、避難生活の質の向上に貢献した。また、避難所だけでなく在宅避難者への支援も行い、支援の過不足をなくす取組を実施した。
- 官民連携の定期会議の設置により、穴水町・穴水町社協・NPO 間の情報共有と協働が促進された。避難所や在宅避難者の課題を共有したことによって、災害救助法に基づくセントラルキッチン設置等の効果的な支援策につながった。
- 在宅避難者訪問活動では、アレルギー対応食品の不足や水道が使えない世帯、自身では各種手続きができない世帯、一部損壊で支援が届かない世帯等、見えにくい課題を発見している。これらの課題を三者連携会議や福祉関係者で構成するケース検討会議等で共有し、適切な支援につなげることで、「取り残される被災者」を減らすことに貢献した。

4 周囲の声

- 被災者からは地震発生直後からの迅速な支援活動に対して、多くの感謝の声が寄せられている。特に避難所での温かい食事の提供や、在宅避難者への訪問支援等、きめ細かな対応が評価されている。
- 地元の農家や家庭菜園を営む住民からは、わけっこコーナーでの野菜販売の機会が好評を得ている。また、地元女性が厨房を使ってパンやスイーツを提供する取組も、新たな活躍の場として歓迎されている。
- 一方で、ボウまち亭が由比ヶ丘団地の目の前にあることから、由比ヶ丘団地の住民しか利用できないのではないかという誤解も生じている。そのため、町全体をまんべんなく支援すること、お褒めの言葉に胡坐をかかないことを意識している。

5 直面した課題と対応

- 穴水町内56カ所に点在する避難所への、均等な支援が大きな課題となっていた。さわやか交流館ブルートを拠点に集中的に調理した食事を各避難所に配布する体制を構築し、支援の偏りを解消している。
- 在宅避難者の中には、アレルギー対応食品が入手できない、水道が使えない、支援が届かないなど様々な課題を抱える世帯が存在する。訪問活動を通じて課題を発見し、専門機関につなぐ「同行支援」を実施している。特に行政手続きが複雑で自力では対応できない被災者に対して、申請書類の作成支援や役場への同行等、きめ細かなサポートを提供した。
- 仮設住宅では、認知症高齢者とその家族、孤立する単身者等、複雑な課題を抱える世帯が増加している。穴水町・穴水町社協・ケアマネージャー・病院等と連携し、「取り残される被災者」に焦点を当てた継続的支援を行っている。

6 今後の展望

- 2025年12月16日、穴水町・穴水町社協とRSYを含む13のNPOが包括連携協定を締結した。協定の内容は、仮設住宅を含む現場支援の継続や関係人口の拡大、官民連携の記録・発信であり、組織的な支援体制の構築を目指している。
- 支援団体としての関わり方を徐々に変えながら、地元の力で継続できる仕組みづくりを支援している。ボウまち亭を地域の交流拠点として定着させ、地元住民が主体となって運営できる体制への移行を目指している。

担当者の声

被災者支援では、避難所や仮設住宅の住民だけでなく、在宅避難者や一部損壊世帯等、支援の狭間に落ちる人々への目配りが重要である。特に複雑な課題を抱える世帯には、行政・社会福祉協議会・NPO が連携して対応する体制が不可欠である。穴水町での官民連携の経験は、南海トラフ地震等、今後の大規模災害への重要な教訓となる。人口規模の違いはあっても、「官民で連携して対応する」という基本的な考え方は普遍的。この経験を全国に発信していきたい。

問合せ先	動画	サイト URL
認定特定非営利活動法人 レスキューストックヤード 法人番号：5180005005492 Tel：052-253-7550 Fax：052-253-7552	—	

《本事例のポイント》

RSYは、平時からの穴水町との信頼関係を基盤に、発災直後から行政・社協と連携した支援体制を構築している。三者連携会議や支援拠点の設置を通じて、避難所・在宅・仮設住宅を横断した支援を行い、支援の偏りや孤立を防いでいる点が本取組のポイントである。